

三条「せと物や町」の成立と変遷

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



中之町出土の茶陶

調査の経緯 1988年に中京区三条通麩屋町東入弁慶石町において実施した調査で、桃山時代から江戸時代初期の茶陶を主とする陶磁器類が多量に出土しました。

その翌年の1989年には約170m東方の三条通柳馬場東入中之町でも、さらにその後の1995年には麩屋町通上下白山町、2006年には富小路三条上福長町でも多量の陶磁器類が出土しています。

下白山町は弁慶石町から約70m、福長町は約140m西に位置し、三条通に沿った東西わずか200m程の範囲に陶磁器が多量に出土する遺跡が集中していることが明らかになりました。

それらのうちで最も整理作業が進んでいる中之町出土分の陶磁器類資料が、平成23年度の京都市指定有形文化財候補とされたのを機に、資料のすべてを調べた上で、それに基づくデータベースの作成を行いました。審議の結果、970点が「京都市指定有形文化財」として登録されました。他の地点の陶磁器類に関しても、指定候補として継続的に再調査を進めているところです。

三条「せと物や町」ところで、慶長年間(1596-1615)末頃の成立とされる『洛中洛外図屏風』(勝興寺本)には、寺町の木戸から三条通を西に入ったあたりに焼物屋の店舗が描かれているほか、成立

年次や場所は明らかではありませんが『洛中洛外図屏風』(福岡市本)にも欄組に陶磁器を並べた店が描写されています。また、寛永元年(1624)成立の『京都図屏風』や、寛永元年から3年(1624)刊行の『都記』には、三条通のふや(魁屋)町西入るに「せと物や町」との記載があります。特に『洛中洛外図屏風』(勝興寺本)では店舗の屋根にはうだつが描写され、間口二間程の店が隣り合っている状況を示しています。描かれている場所こそ異なりますが、中之町では1989年の調査地の東に隣接した場所で、糸割符商人で唐物屋も営んだといわれる有楽新兵衛の屋敷跡から多量の茶陶類が、江戸時代の享保年間(1716～1736)にも出土したことが知られています。

「せと物や町」の変遷 各地点の出土遺物の内容の共通点は、陶磁器類の中に占める茶陶類の比率が異様に高いことです。大半の陶器類に使用痕がなく、地点ごとに主体となる陶磁器類の内容に傾向があることから、一般の町家で使用されたものではなく焼物を商う店舗に関わるものと考えられます。まさに、上記の史料に記されてい



焼物屋の店先

『洛中洛外図屏風』(勝興寺本)を参考にした。



『都記』に見る「せと物や町」



桃山時代・江戸時代初期の茶陶多量出土跡位置図

るような「せと物や町」という町名にふさわしい景観が展開していたと思われる。ただ、『寛永十四年洛中絵図』には「せと物や町」の記載はなく「中之町」と現在の町名に変化しており、この時点では焼き物を商う店舗は減少あるいはほとんどなくなり、「せと物や町」と呼べるような状況ではなくなっていたでしょう。

これは、出土した土器・陶磁器類の时期的な検討からも同様の変遷が推測できます。陶磁器類と一緒に出土した土師器の種類から類推される各地点の時期を検討すると、上にあげた5箇所(新兵衛屋敷跡を含む)の地点のなかでは弁慶石町が最も古く、慶長期後半から末年頃に位置づけられます。町家としては存続していたようす

が、以後の遺物には茶陶類はほとんど含まれず、輪の羽口や増端などが出土することから焼き物屋ではなくなっていたと考えられます。中之町・下白山町・福長町の3箇所はほぼ同時期で、陶器類とともに出土する土師器は元和年間から寛永年間初頭(1615～1625頃)とみてよいでしょう。新兵衛屋敷跡出土品は土師器が採集されておらず明らかではありませんが、現状で確認できる陶器類からみて弁慶石町よりやや新しく、中之町と共通する要素もあることから、その間か中之町に近い時期が想定できます。このようにみると『京都図屏風』や『都記』の記載は「せと物や町」の最後に近い時期を記録したものといえるでしょう。

(平尾政幸)